

CLC からしだね書店便り



CLC からしだね書店では…

- ① キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書の販売もする予定です。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

『牧師、閉鎖病棟に入る。』 沼田和也著

実業の友社《税込》1430円

読書感想本



本の帯には、「絶望と再生」とありますが、まさに一人の絶望した牧師が、閉鎖病棟での体験、出会い、治療を通して、どのように再生していったのかを描いた本です。

著者の沼田和也牧師は、教会付属幼稚園の理事長兼園長でもありました。ところが、経営責任者にのしかかる膨大で複雑な仕事と、責任、緊張で、ころはパンパンに膨れ上がっていき、ある日とうとう爆発。大声で怒鳴り散らし、もはや修復不可能な対人トラブルを引き起こしてしまっています。

「死期が迫っている。だからその促しにしたがって、首でも吊ろう。その思考の連鎖に違和感もなく、恐怖もなかった。今までよく生きてきた。でも、もう死ぬんだな。それでいい」と、彼は思います。

けれども、妻の愛に少しころがほぐされて、ようやくこの出来事は「反省や謝罪、対話」で解決するレベルのものではなく、「治療」の対象としてとらえるべきなんだと気づきます。

沼田牧師が病院に行くと、医師から「閉鎖病棟に入ってもらおう」と言われます。自分や他人に危害を加える可能性が高い人が入院する「閉鎖病棟」に、牧師である自分が入る。スーツを着て誰かの見舞いに行っていた牧師が、治療を受けお世話されるために、スエットの上下姿で入院しに行く。その現実から目をそらし、入院を拒否することもできずと思えますが、沼田牧師は無力な一人の精神病患者となって、閉鎖病棟という未知の世界に入っていきます。

主治医は治療の中で、遠慮なく、真正面から言葉を投げってきます。沼田牧師は我慢できず、苛立ち、怒り、「こんなものは治療ではない！」と叫びますが、主治医はひるまず言います。

「あなたは今までか、わたしに自分のありのままを受け入れて欲しいですよね。『今までよく頑張ったねおつかれさま。あなたは悪くないですよ』と慰めてもらいたいですよね？ そうやって労わってもらいたい

でしょうね、みんな周りのせいにして。でも、ここでやるべきことは、それじゃあないんですよ。あなたがこれまで積み重ねてきた挫折の数々。あなたはそこにある共通点を見つけ出し、見つめ、内省を深めなければならぬんです。そうでなければ、あなたはこれからも同じ挫折を繰り返すだけです」

「なぜいまこうなっているのか、自らの思考の癖について、考えを深めていかなければならないですよ」主治医が突いているのは、「思考の癖」です。人格や性格や信仰を矯正しようとしているわけではありません。「思考の癖」がその人を生きづらくしたり、他者とのコミュニケーションを著しく阻害する要因になったりする。下手をすると、その「思考の癖」が人を傷つけ、自らを傷つけ、命さえ危険にさらすことがある、ということなのです。そして、そこが精神科の治療の対象となるのです。

沼田牧師は、教会の中で牧師として「あなたはありのままでもいい」というメッセージを発し続けてきました。しかし、それは自分自身にとって都合がよく、心地よかったからだだと気づきます。そもそも「ありのままの自分」像は、本当に「ありのままの自分」だったのか？「ありのままの自分」なんて、そんなに簡単にわかるものなのか？罪とは「的を外す」ということですが、これこそが「ありのまま」と思った「ありのまま」はことごとくマトを外し、マト以外のところにぐさぐさ刺さり、ずっと自分を痛め苦しめている。いいかげん、「ありのまま」にとらわれてしまう「思考の癖」にこそ、目を向けなければならぬ、と。

私はここで交わされた主治医と沼田牧師のやりとりや、「ありのまま」に向けて槍を投げるといことが、ぴたとわかったわけではありません。ただ、人を教え導き相談にのったりするキリスト教的「正しい」自分像を「私のあるべき姿」と思いこんでいる自分と、「ありのままの自分」は、とても弱くて、傷つきやすくて、もろいのです。と、手のひらを反して逃げ出していく自分との間を、無自覚に行ったり来たりし、じつはそのどちらもマトを外している、そういうことがありがちではないかと、ちょっと思っています。

閉鎖病棟では、ありのままに生きられない人たちが生きています。「人を殺してはいけないのはなぜか」「自傷行為をしてはいけないのはなぜか」と、彼らは沼田牧師に疑問を投げかけます。それは「自分とは何か」と





か「いかに良く生きるか」とかいった哲学的な問いでも宗教的な問いでもなく、「生きもの」としてのレベルの、生々しい生臭い問いのように思います。「聖書にそう書いてあるから」とか「キリスト教の教えでは」とか「祈ればいつかきつとわかる時が来ます」といった「高レベル」な次元からの解答は、彼らの疑問のマトをことごとく外し、全く通用しません。

沼田牧師は今も牧師を続けておられます。「精神障害のある人に牧師は無理だ」と、言われたそうです。でも私は、「生きもの」としての生々しく生臭い問いを投げかける人と一緒に、その生々しい問いと格闘することができるのは、この牧師さんだからこそだと思います。

世界は、理不尽で生々しい生臭いことで満ちています。コロナはそれを浮き彫りにしました。教会は、その生々しき、生臭さから目をそらしてはおれない時代になりました。高レベルな解答者から下りていき、生々しき、生臭さの中でもがく人々とともに、そこにおられる神の福音とは何か、その福音を現実の暮らしの中で具体的に実行するとは何か。そこに目を向ける時がきたのかもしれないと、そんなことを考えさせられた本でした。

(C)からしだね書店 店長

《お知らせ》

◆からしだねの「おすすめ本スポンサー」システム◆について

あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか？残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうなたらいいなと思っています。)店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

【連載】子どもがひびく時

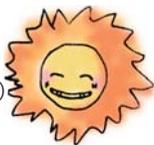
第六回…子どもとの関わりは心理学的テクニックを 用いようか？操作か？支援か？

その昔、ある団体が主催する「教会学校スタッフのためのセミナー」に参加したことがあります。チラシに「しつけ」、「訓練」、「犠牲」といった言葉が楽しそうに踊っているのが、少し気にはなりましたが、「子どもたちがたくさん集まる教会学校」「子どもたちの居場所的な教会」というので、関心をもって参加してみました。

予想を遥かに上回る内容でした。まず驚いたのは、スタッフと子どもたちの「テンションの高さ」です。常にニコニコとした笑顔で、ものすごく礼儀正しくハキハキと挨拶してくれます。まさに「しつけ」が徹底して行き届いている印象です。ゲームが始まると、怒涛の勢いで駆け寄ってきて、「ニッカー」とした笑顔で握手を求められます。ジャンプして、体を動かして、走って…感情の激流に押し流されるように、プログラムがどんどん進んでいきました。あまりの明るさに、そして、あまりの笑顔とテンションの高さに、私は度肝を抜かれました。いえ、「テン引き」と言った方が正確な表現になるでしょうか。プログラムの一つが終わり、休憩時間になった時、スタッフの方が得意満面の表情で「こう教えてくれたのです。「ゲームの中で、みなさんにジャンプしてもらったでしょう！？あれをすれば、どんな子どもも笑顔になるんですよ！しかも面をしてピョンピョン飛び跳ねている人なんていないじゃないですか。ジャンプをさせれば、どんな子どもも笑わずにいられないんですよ…」

この解説を聞いた瞬間、胸の中に何か嫌なものを詰めこまれたような「何とも言えない不快感を味わいました。「人間にとつて大切な何かを冒瀆されている」。そんな感覚です。「ジャンプをさせれば、どんな子どもも笑顔にできる」？それは果たし

臨床心理士
坂岡 大路
1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童をを経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019年『2021年』成長(い)のこは社(株)に「こころで学ぶ教会学校」を連載。



「からしだね館」のついでに 「からしだね」の支援

自身の病氣、家族との別離、寂しさを埋めるために
唯一そばにいてくれた愛犬とも離れることになった
M子さん。(6月号をご覧ください)



それを後盾に「正しい行動」を子どもに強制できます。だからこそ、「自分が子どもに期待している行動は、『相手にとっていいこと』なのか、それとも『大人にとって都合のいいこと』なのか」、みんなで吟味する必要があります。そうでなければ、自分にその自覚がなくとも、無意識に「コントロール」することになってしまつてしまうでしょう。

「疑いの余地なき揺るがぬ信念」ではなく、「ゆらぎに持ちこたえる開かれた自己吟味」。この最低限の倫理感が欠如するならば、子どもとの関係は容易に「操作」へと転落します。それは、子どもを「人間」ではなく、「モノ」扱いすることです。子どもは大人の一部分ではありません。自分と異なる、れっきとした「人格」であり、ままたらぬ「他者」です。だからこそ、ズレやゆらぎが生じて当然なのです。ズレやゆらぎの実感、大人の「無能さ」や「権威失墜」を表すものではありません。それはむしろ、あなたが「人」として相手と向き合っていることの証明なのです。

《お知らせ》

- ◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。
- ◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させていただきます。ご相談ください。
- ◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

「究極の選択」

入院中のMさんを訪問し、施設にぶうたくんを預けた時の様子を一部始終話しました。費用的な負担を退院後の彼女がはたしてどこまで担いきれるのか…。里親の選択肢も考えてほしいと何度も彼女に伝えました。いつになく静かな口調ではありましたが彼女の回答は次のようなものでした。自分には家族と思える存在は、ぶうたくんしかいない、一人ぼっちの生活にこれ以上耐えられない自信がない、ぶうたくんを預かってもらう費用は、絶対(分割で)返済する、治療を受けて絶対3か月で退院する。

実は里親について彼女にしつこくお願いしたのは、「ぶうたくんを育てることが彼女にもぶうたくんにもプラスになるように思えない。里親さんを絶対みつけてあげるから、なんとしても彼女に理解してもらって」と、ある動物保護団体の方からの申し出があったからでした。

彼女の生きる希望とぶうたくんの命、それを誰が選択できるのか…。私も、そばで聞いていた関係者も、この先の彼女がどうなるのか、症状がそれなりに改善するのか、正直まったくわかりませんでした。しかし、この時点での彼女の決意を信じたい、と思いき3か月様子を見るという結論をもって病院を離れました。

「さらなる喪失に彼女は…」

それから3か月

あの日から彼女は変わりました。治療を受け入れ、病院の関係者とも穏やかにやりとりを進めることができました。になりました。それなりに落ち着いていた彼女は、初めの宣言通り、3か月で退院できることになりました。

自宅に戻って、ぶうたくんと二人暮らしが再開されました。

彼女の家に戻ったぶうたくんは、お腹の調子が良くないのか、落ち着かず、えさも食べず、下痢をしていました。病院に連れて行かないと脱水症状になるのでは…そんな状況でした。しかし私は「病院に連れていこう」とは言えませんでした。彼女が病院の費用を払うのは不可能だとわかっていたからです。なんとも言えない思いで彼女の家を出ました。

翌日、訪問看護師からすぐに来てもらえないかと連絡が入りました。ぶうたくんに何かあったのかも知れない、と別の予定を変更して飛んでいきました。

彼女は涙を浮かべながら、「ぶうたくんに新しい家族を見つけあげてほしい」と。昨日からどんな気持ちの変化があったのかを聞くと、「ぶうたくんは元気で幸せであってほしい。自分にはそれをしてあげることができない」と答えました。

「自分」が「一番でなくなる」とき

彼女との数年にわたる付き合いの中で、この時ほど明確に、彼女が「自分」よりも「他者」の幸せを優先させ、物を判断するのを見たことがありませんでした。

家族との関係においても、彼女はどこか、「自分」発信でした。自分が寂しいから母親にずっとそばにいてほしい。妹がずっと自分のできないことをやってくれていたから、妹がいないと困る。自分にとってどうか…がたえず彼女の判断の基準になっているようでした。

ぶうたくんに対しても、「自分にとってぶうたくんがいてくれないと寂しい、生きていくのがつらい」でした。しかし、下痢で弱っていくぶうたくんを目の当たりにしながら、ぶうたくんの命と幸せを優先にする思いが変わったように見えました。

愛護団体の方に連絡をとると、すぐにぶうたくんの家族を探してくれました。愛護団体の方も、なぜか絶対私からの連絡が入るだろうと「予感」がしたそうで、ぶうたくんにぴったりな家族に、すでに話をしていましたそうです。そこからはとんとん拍子でした。

ぶうたくんを引き取る日が決まりました。ぶうたくんに最後のお別れをする時、彼女は晴れやかな顔で、ぶうたくんを抱き上げ、「絶対絶対幸せになつてや」とぶうたくんに声をかけました。

「新しい希望」「新しい生活」

大きな喪失を経験した彼女は、その後、医療や福祉の支援をうまく受けながら、自宅での生活を継続しています。

「自宅を片付けてきれいにしたい」「菓の量が減るように頑張りたい」と体や生活に目を向けるようになりました。自分を大切にしよう、そんな気持ちに戻ってきたのかな、と思います。彼女が喪った「自分への信頼」が回復されたように思うのです。

彼女は、自宅以外で過ごす時間を増やすため、就労支援の事業所で週2日、半日の作業に取り組みようになりました。その事業所で他者と楽しそうに話をしたり、レクリエーションでケーキを作ったり、かつて想像できなかったような他者との交流を楽しんでいます。他者に対しては「不信任」しかなかったように見えた彼女でしたが、これだけ複数の他者へ心を開くのを見ていると、「他者への信頼」を取り戻したように見えるのです。

ぶうたくんに里親を見つけてくれた団体が、新しい家族の中で元気に暮らしているぶうたくんの写真を定期的に送ってくれます。「トイレトレーニングをしています」「お散歩は田んぼのあぜ道を1時間近くしています」「○○のドッグフードが大好きです」というコメントを添えて。彼女はそれを心待ちにしています。そして、元飼い主としてその団体にお礼の手紙を出しました。ぶうたくんを委ねたこの団体が、信頼に値するものだった。「社会への信頼」も回復されたのではないのでしょうか。

「弱さ」のもつ世界

私は、彼女の傍らでハラハラしながら、「どうすれば彼女がこの喪失の中に立ち、そこから未来に希望を見出すことができるのだろうか…」それを考え続けてきたように思います。自分や他者、社会への信頼を喪った人のところにやってきた、あまりにもか弱い命。誰が見ても、ぶうたくんの存在は大きな不安要素でしかありませんでした。しかし、この一連の出来事を振り返るときに、このぶうたくんの存在は、彼女の喪失を回復へと導くきっかけ、新たな希望の始まりだったのかな、と思います。

私たちの見ることのできる世界には限界があります。

弱さ + 弱さ = 不安 絶望 落胆

しかし、私たちの生きる世界は、私たちの想像をこえた世界があるようです。

弱さ × 弱さ = 新しい希望

大げさかもしれませんが、M子さんの物語によって、私は、弱さのもつ世界をまた一つ味わっているように思うのです。そしてこの世界に生きたいとさらに強く願うものになりました。



障害のこと、福祉のことで「こんなことを聞いてみたい」ということがあれば、ぜひ、CLCからしだね書店 (clc@karashidane.or.jp) までお知らせください。

からしだね書店では、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしたりしています。

献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただけると
ありがたいです。
書店への直接お持ち込みも
ありがたいです。

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るとい方は、お知らせください。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

【献本者】 お名前記載漏れがございましたら、ご一報くださいますようよろしく願いいたします。

長谷川和雄様、相川美恵子様、多田出佳代子様、関正道様、平栗彰様、N.U. 様、木村靖子様、佐野弘子様、宮崎佳史様、吉村孝雄様、山田素朗様、山崎俊生様

編集後記

◆からしだね書店の軒下のツバメの子は、ある日曜日をはさんだ月曜朝に、なぜか全員なくなりました。まだ飛べないはず…。がっかり落ち込むからしだねの人間たちのことなどおかまいなしに、新たな卵を産み育て始めたツバメ夫婦。たくましいというか、ちょっとあっさりし過ぎではないでしょうか。

◆6月にNHKのEテレ「100分で名著」で「華氏451度」という小説が取り上げられました。本が焼却される社会。じっくりと考えることをやめてしまう社会。書店の本が焼かれている様子を想像するだけで、なんと恐ろしいことかと思えます。「100分で名著」も「華氏451度」もからしだね書店の棚にあります。

◆からしだねは福祉施設でもあり、職員はコロナワクチン優先接種の対象になるとのことです。書店での感染予防のためにも、受けられる人から受けていこうと思えます。

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館

書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025

書店メール clc@karashidane.or.jp